

論文の内容の要旨

日本戦後文学における動物の表象について ——武田泰淳・大江健三郎・小島信夫を対象に

村上克尚

本論文の目的は、武田泰淳、大江健三郎、小島信夫の作品における動物の表象に着目し、人間性という戦後的な理念の問い直しを試みることである。

本論文の視座は、クツェー、アガンベン、デリダなどの、近年の動物をめぐる哲学的議論に影響を受けている。彼らは、人間／動物という境界区分が政治的なものであり、この境界区分が人間の人間に対する暴力を生む原因になっていることを示した。本論文でも、人間／動物を生物学的区分というよりも、政治学的な区分として捉え、文学作品の分析を行っていく。

文学における動物の表象の研究は、英米文学研究や古典文学研究などでは近年活発に行なわれている。しかし、近代文学研究においては、宮沢賢治などの個別の作家の研究を除けば、いまだ十分な取り組みがなされていない。本論文は、敗戦直後から一九七〇年代までを対象とし、人間性の理念が称揚された戦後という時代に、あえて動物の表象に強い関心を示した三名の作家を選定し、論じていく。

従来の戦後文学史では、武田泰淳は第一次戦後派、小島信夫は第三の新人、大江健三郎は石原慎太郎と同じ若い世代の作家として、区分されてきた。しかし、彼らの文学作品はいずれも動物の問題に強い関心を示している。この点に着目すれば、従来の世代に基づいた区分に囚われない、戦後文学史の書き直しが可能になる。また、一人の作家に焦点化していたのでは見えてこない、動物の多領域に及ぶ問題を追っていくことも可能になる。

本論は、全四部・一二章から構成される。

第一部「武田泰淳——国家の戦争と動物」では、戦争を扱った泰淳の作品を取り上げ、その中で動物にどのような位置が与えられているのかを考察していく。第一章では、「審判」（一九四七年）を取り上げる。この作品では、敗戦直後の上海を舞台に、自己統制的な主体としての人間が、動物のように殺害した中国の民間人に関する記憶の回帰に苦しめられる様子が描かれている。これを手掛かりに、小説家泰淳の出発と動物の問題とが切り離し得ないものであることを論じる。第二章では、『風媒花』（一九五二年）を取り上げる。朝鮮戦争下の日本における、中国文学研究会の同人たちの葛藤を描いたこの作品からは、友人竹内好が提唱していた国民文学論に対する距離を読み取れる。国民へと同化されない余剰としての動物の表象に着目することで、二人の差異を明らかにしていく。第三章では、「ひかりごけ」（一九五四年）を取り上げる。戦時下で遭難し、食人を犯さねばならなかった船長の裁判を描くこの作品では、戦争という大量殺人に加担している国民が、食人を犯した人間を獣として排斥し、死刑に処そうとすることの奇妙さが強調される。ここに至って、国家こそが、人間と動物の境界線を支配し、殺害しても良いもの／殺害してはならないものを決定しているという事実が浮かび上がってくる。

第二部「大江健三郎——動物を殺害する人間」では、なぜ大江の初期小説に動物の表象が頻出するのか、にもかかわらず、なぜその動物の表象はこれまで注目されなかったのかについて考察していく。第四章では、「奇妙な仕事」（一九五七年）を取り上げる。実験用の一五〇匹の犬を殺すアルバイトを学生たちが引き受けるというこの作品では、犬殺しの場とナチスの強制収容所との重ね合わせが行なわれている。これを手掛かりに、ファシズムの本質に人間／動物の分断が存在するという基本的な構図を浮かび上がらせる。第五章では、「飼育」（一九五八年）を取り上げる。飛行機から墜落した黒人兵が獣のように村人たちに飼育されるというこの作品に対して、江藤淳や三島由紀夫は、ことごとく黒人兵への応答責任を取り逃した批評を展開している。これらの批評の分析を通じて、当時の言説の中で、動物がどのような位置に置かれていたかを明らかにする。第六章では、「セヴンティーン」（一九六一年）を取り上げる。浅沼稻次郎社会党委員長を刺殺した一七歳の少年山口二矢をモデルとするこの小説では、動物的であること、女性的であることを嫌悪する主人公が、自らの人間性、男性性を証明しようとあがく末に、天皇との同一化に至ってしまう過程が描かれる。言い換えれば、女性や動物への嫌悪が、男性の傷つきやすさを隠蔽させ、国家という巨大な暴力装置への同一化を促すという構造が存在している。

第三部「小島信夫——家庭を攪乱する動物」では、小島の家庭小説と軍隊小説に共通して馬が登場することに注目し、その意味について考察していく。第七章では、「馬」（一九五四年）を取り上げる。主人公が知らない内に、妻が家の新築を進め、そこに馬が住み着くようになるというこの作品からは、家

庭の主人と国家の主権との重ね合わせが読み取れる。その上で、内部の領域を攪乱する他者として、馬が呼び込まれることの意味を考えていく。第八章では、『墓碑銘』（一九五九～六〇年）を取り上げる。アメリカ人との混血の主人公が日本の軍隊に取り込まれていく過程を描いたこの小説でも、軍馬に大きな役割が与えられている。人工的な交配を繰り返し、軍事化された生命である軍馬と、混血の主人公との出会いが、どのような帰結をもたらすのかを確認する。第九章では、『抱擁家族』（一九六五年）を取り上げる。妻がアメリカ人青年と姦通を犯したことを契機に、主人公の家庭が崩壊を始めるというこの作品に対して、従来の批評は、妻の欲望を、アメリカ＝近代化に対する欲望と捉えてきた。しかし、この欲望を、近代家族を超え出るクィアな欲望として読み直せば、『抱擁家族』の結末は、必ずしも「崩壊」という否定的なニュアンスで捉えられるべきものではなくなる。こうして、国家や家庭といった内部の領域からの脱出の可能性が、動物とクィアの交差点に浮かび上がってくる。

第四部「動物との共生へ」では、六〇年代後半から七〇年代にかけて書かれた、泰淳、大江、小島の長編小説を取り上げ、初期の動物の主題が、その後どのように発展していったのかを考察していく。第一〇章では、泰淳の『富士』（一九六九～七一年）を取り上げる。戦時下の精神病院を舞台に、患者たちとの関係に戸惑う医学生を主人公にしたこの作品では、精神障害者と動物の相似性についての描写が至るところに散見される。それらに着目しつつ、この作品が、国家が設定する人間／動物の枠組みを超え、多様なものたちとの共生に至る道をどのように提示しているのかについて考察していく。第十一章では、大江の『万延元年のフットボール』（一九六七年）を取り上げる。二人の兄弟を主人公とするこの作品では、鷹とネズミのイメージを通じて、主権者としての獣と、傷つきやすい動物の対立が設定されている。明治維新百年という同時代の文脈にも留意しながら、この獣と動物の対立、及びその崩壊が意味するものを、テキストに即して読み取っていく。第一二章では、小島の『別れる理由』（一九六八～八一年）を取り上げる。異例の長期連載の末に全三巻の単行本になったこの作品では、物語の中盤で主人公がロバと性交したり、馬に変身したりする。これを手掛かりにして、主人であることからの逃走の欲望が、クィアな世界へと誘惑する動物の表象を呼び寄せ、最終的には小説の形式自体を攪乱してしまう過程を辿っていく。

終章では、各章での作家、作品ごとの分析の総合を試みる。

三名の戦後作家の作品は、戦争、戦後社会、家庭という三つの領域において、人間／動物の境界線がいかんにか機能しているかを開示した。戦争の場において、人間／動物の境界線は、他国の侵略・植民地化、戦場での殺人を正当化する根拠として機能すると同時に、自国の国民を兵士へと教育し、軍隊に同一化させる際にも機能している。戦後社会において、人間／動物の境界線は、他国の国民の苦しみに目をつ

ぶり、主権国家を立ち上げていく際に、国内の犯罪者を「異常なもの」として処罰する際に、あるいは占領者への抵抗を組織する際や、学校における規律訓練教育の際にも機能している。最後に家庭において、人間／動物の境界線は、家庭規範に沿うことのない男性、女性を処罰する際に機能しているのを確認できる。このように、近代主権国家においては、あらゆる場所で、人間／動物の境界線が機能している。

これを乗り越えていくために、三名の戦後作家は、混血、変身、歓待という三つの方法を、文学作品の中で提示した。混血は、主体が他者との根源的な関係性を負って成立していることを示す。変身は、人間／動物の境界線が常に反転可能であることを示す。歓待は、異質な他者を迎え入れることで、自分を拘束しているメカニズムを攪乱できることを示す。そして、彼らのこれらの方法は、最終的に依存と共生という共通の地平を開示する。これは他者とのあいだに常にすでに結ばれてしまっている、本質的に非対称的な関係に内在することで、自律的な主体としての人間を理想化する近代主権国家の暴力を乗り越えていく道を示したものである。

以上のように、本論文では、戦後作家の作品に表われた動物の表象の分析から、人間性という理念が近代主権国家の暴力と共犯関係を持ってきたことを明らかにすると共に、彼らの作品が、依存と共生のヴィジョンを通じて、このような暴力を乗り越えようとしていたことを明らかにした。